

# 三人称普通名詞としての人称代名詞

福 沢 将 樹

## 要旨

現代日本語のいわゆる「人称代名詞」は、「わたし」や「あなた」も含め全て「三人称」である。つまり「代名詞」という一類を立てないというに止まらず、「三人称」を表す「普通名詞」の一種であるとする。

## 第1節 現代日本語の「一・二人称代名詞」は「一・二人称」か

いわゆる「人称代名詞」が現代日本語文法において「普通名詞」と区別すべきかどうかという議論はかつてしばしばあった。しかし、そこには見落とされてきた論点があった。代名詞を普通名詞と区別する必要はないという議論（以下「代名詞非特立説」と呼ぶ）の中で、もし本当に区別しないのだとすると、次のようなことになるはずであった。即ち、「普通名詞」は、全て「三人称」である。いわゆる「代名詞」は「普通名詞」と区別する必要はない。とすると、いわゆる代名詞——「わたし」や「あなた」——は、みな「三人称」の名詞ということになる。

つまり「代名詞非特立説」（本稿の筆者も賛成する）においては、次のようなことになるのである。

(1) 現代日本語におけるいわゆる「人称代名詞」は、全て「三人称」である。

この論点について筆者は、既に福沢（2015）（以下「前著」）において、以下のように論じたことがある。

- (2) […] つまり、現代日本語には元々「人称代名詞」は存在せず、「わたし」「ぼく」「おれ」、「あなた」「おまえ」など全て三人称表現の使い分けであると考えられるということである。[…]

[…] つまり話し手—聞き手関係の制限があるからといって、それが「一人称」「二人称」の現象であるとは必ずしも言えない。むしろ現代日本語の「一人称」「二人称」を表す語として、極めて多数の表現が使い分けされなければならないところに、単純に「一人称」「二人称」とは言いがたい点がある。この細かな使い分けは、むしろ普通名詞の使い分けに近い。  
(福沢 2015: 223–224)

これは要するに、現代日本語において「代名詞」というカテゴリーが存在しないだけでなくそれが「三人称」名詞であることを指摘したものである。そして前著執筆の時、この見解は、それほど特異なものではないと筆者は思い込んでいた。例えば鈴木孝夫や三輪正らが同様の議論をしているものと思い込んでいた。しかし、いざ引用しようとして該当箇所を探すと、適切な記述を発見することができなかった。“似て非なる”というか一歩踏み込みの足りないものしか見出すことができなかったわけである。そういうわけで前著では、レファレンスをつけることができなかった。

そこで本稿は、(代名詞非特立説を前提として) 以下の二つの見解①②を明確に区別しようというものである。

- (3) ①現代日本語には「代名詞」と「普通名詞」を区別する必要がなく、単に「名詞」にすぎない。  
②現代日本語には「代名詞」は存在せず、「代名詞」だと思われているものは、単に「名詞」というに止まらず、みな「三人称の普通名詞」である。

便宜上①の立場を「単純名詞説」と呼び、②の立場を「三人称説」と呼ぶこととする。前者は「代名詞非特立説」のうち、これまで代表的だった見解である。

## 第2節 先行研究

現代日本語のいわゆる「人称代名詞」において、次のような特徴のあることがしばしば指摘されている。以下一々の研究史は挙げないが、金田一（1989）が便利なのでやや多く参照し、私的に補足を加える。

- (4) ①（特に一人称・二人称において、他言語に比べ）種類が多く、使い分けを必要とする（金田一 1989など）。一人称：「わたし」「ぼく」「おれ」「あたし」「自分」「当方」「こちら」等。二人称：「あなた」「きみ」「おまえ」「あんた」「てめえ」「貴殿」「そちら」等。英語やドイツ語においてはこれほどの種類を持たない。むしろ「旦那」「お客様」「お宅」など多様な表現との間に paradigmatic な体系をなしている（鈴木 1982）。
- ②しばしば「省略」される（金田一 1989など）。スペイン語等の場合には動詞の変化によって人称の区別がなされており、必ずしも人称の区別が表現されていないわけではないが、日本語では古来、表現そのものがなされないことがしばしばである。
- ③歴史的にさかんに交替を繰り返してきた（佐久間 1959など）。これもまた、他言語においては古くから同じ語（音韻上の変化はあるけれども）の使い回しにほぼ終始しているのとは異なる。もっともドイツ語の二人称のように多少の交替は見られないわけではないが、日本語では種類が多く盛んに交替している。
- ④「普通名詞」と「代名詞」を文法上区別する必要が薄い。①連体修飾を受ける（金田一 1989など）。例えば「美しい日本の私」「日本語が話せる彼」のように。②複合語・派生語を作ることができる。ものによっては違和感もあろうが、「あなた好み（の）」「わたし的（には）」のように。
- ⑤同一語が他の人称へ交替することがある（金田一 1989など）<sup>1)</sup>。「ちよっ

1) イェスベルセン（2007：296以降）は、英仏の子供においても一人称と二人称の混同が起ることを記述している。なお三人称普通名詞を自称詞・対称詞として使用することが多くの言語に見られることは多くの指摘がある。

とそこのぼく」「そこのかのじょお茶しない？」は一人称や三人称の代名詞を二人称（呼びかけ）へ転用。「かれ、大学どこ？」<sup>2)</sup>「じぶん（は）、どうなん？」は三人称代名詞や再帰代名詞を二人称へ転用。

前著執筆後、(1)に関わる先行の指摘が既に存在したことを知った。この他にも、小さく指摘しているものは、他にもありそうな気がしてならないが、現時点で知り得たものは次の記述である。

- (5) こうして見ると日本語には人称という範疇が存在しない理由がよく分かります。日本人はできる限り、話の相手との心理的対決を避けたいのです。ですから一見二人称のように使われる〈あなた、おまえ、そちら〉などは皆相手のいる場所を言うことで相手を間接的暗示的に指すだけです。しかもこれらの擬似代名詞さえも出来るだけ使わずに済まそうとして、〈旦那、社長、奥さん〉などや相手の職業名を使うのです。このようなわけで日本語には西洋の言語に見られるような二人称代名詞は存在しないのです。強いて人称代名詞という用語を用いるならば、日本語では〈私〉や〈俺〉も含めて全てが三人称だと言うしかありません。

(鈴木 2009：211-212。傍線部引用者)<sup>3)</sup>

鈴木孝夫による(5)は、まさに本稿で言いたいことを既に述べたものである。但し、いかにもおまけで付け加えたような感があり、ここで文章はぶつっと切れている。しかし、「三人称である」とはどういう趣旨かということは、既にさんざん触れたから改めて詳述する必要はないということかもしれない。鈴木が既に触れた論点というのは、以下の諸点である。

2) この例は、筆者が学生時代に単発のアルバイトをした際（1990年代札幌市）、居合わせたアルバイトに実際に言われた発話である。最初はまさか二人称として自分が言及対象とされているとは思わず、びっくりしたことを覚えている。同様の用法について鈴木（1996）田窪（2010）にも指摘がある。

3) 初出媒体は『新潮45』である。もちろん、当時の同誌と近年の同誌では、編集者も編集方針も違いがあるだろうし、発表媒体の政治的立場と個々の執筆者のそれとは必ずしも同一視できない。

- (6) ①話し手を指すということでは、「お父さん」など親族用語も用いられ、聞き手を指すということでは「先生」「旦那」「お医者さん」などの普通名詞も用いられる。よって「一人称代名詞」「二人称代名詞」ではなく「自称詞」「対称詞」として把握されるべきである。
- ②現代日本語のいわゆる人称代名詞の起源は、普通名詞や場所／方向を表す指示詞であって、太古の昔から人称代名詞であったわけではない。
- ③英語でも聞き手や話し手を三人称で表現することがある<sup>4)</sup>。

このような論点を述べた後に締めくくりとして(5)が述べられているのである。

(5)と違ってよくあるタイプの記述としては、以下のようなものがある。いずれも少し踏み込んだ記述となっているが、まだ「三人称」と明記しているわけではない点、「単純名詞説」の域を脱しているわけではない。

- (7) […] このように、話し手がどちらになるかという立場の違いを反映するという性質を三上(1955)にしたがい、境遇性があるということにする。この意味でこれらの語類は境遇性を持つ。したがって、これらの語類が人称をもつばら表す語類であるということはいえるわけである。しかし、これらの語類を人称代名詞とすることはできない。人称代名詞という範疇は基本的に性数格の一致のある言語において、その一致特性のみを担う範疇である。したがって、名詞と区別された統語範疇としての代名詞は閉じた語類で、原則的に語彙的出入りはない。これに対して「あなた、わたし」など、日本語の人称を表す語類は、必要があれば外来語からでも流入できる。[…] これらは開かれた語類であり、他の名詞類と区別する文法的理由はない。そこでこれらの語類を人称名詞と呼ぶことにする。[…]
- (田窪 2010 : 262)

4) 電話がかかってきたとき「Who are you?」ではなく「Who is this?」と聞き返す例、相手がその人であるか不安な場合に「It's Mr. Smith, isn't it?」と確認する例、また母親が幼児を相手に「I」ではなく「Mummy」と称する例、その他独り言・内言の中で自分を you で指す例などが指摘されている。鈴木(1996) 他により詳しく論じられている。

- (8) このこと〔引用者注——日本人の自己規定が相対的であること〕は日本人が自称詞として、いわゆる一人称代名詞を使う場合でさえ、あてはまる。たとえば日本の成年男子は場面により、相手により、私と僕、僕と俺などを使い分けている。これは自分と相手との間の権力の差、親疎の度合などを反映した使い分けとされているが、これとて特定の相手を見てから決める以上、対象依存型の言語的自己規定であることには変りがないのである。(鈴木 1973: 197-198)

鈴木(1973)のほか三輪(2000)のように、日本語の代名詞や敬語の用法が、対話の際に対等でない人間関係を作り上げていることを問題視する意見もしばしば見られる。しかしその場合も、一・二人称代名詞を単に「代名詞」とのみ見ており、「三人称の普通名詞」と見ているわけではない。

指示代名詞と人称代名詞の関係について、よく見られるのは山田(1908)のように、指示代名詞と人称代名詞を区別した上で、指示代名詞はみな三人称と位置づけるものである。つまり「指示代名詞」については全て「三人称」(山田は「第三称」とする一方、「人称代名詞」の方は「三人称」の他に「一人称・二人称」(同「第一称・第二称」)を持っている。

- (9) 山田(1908: 190)における代名詞

第一称	第二称	第三称				不定称	
		定称			不定称		
		近称	中称	遠称			
わ、	な、	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、 か、かれ、	た、たれ、	人	
われ、	なれ、	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、 か、かれ、	いづれ、 なに、	事物	
あ、	なむち、	ここ、	そこ、	かしこ、 あそこ、 あしこ、	いづく、 いづこ、 いづら、	場所	
あれ、		こち、 こなた、	そち、 そなた、	あち、をち、 かなた、 あなた、	いづち、 いづかた、	方向	

従って一・二人称代名詞のみが特殊なことになる。たとえ「こちら」「あな

た」のような「指示代名詞」が人物を指し自称・対称として用いられることがあっても、それが指示代名詞である以上「三人称」として判定されることになる。一方、ひとたび「人称代名詞」として判定された途端、「一人称」ないし「二人称」として位置づけられることになる。

一方三上（1955）は少し特異な人称体系を提案している<sup>5)</sup>。「A称」「H称」はそれぞれ「相手」「話手」の意と思われる。しかしこの提案（近称／遠称の区別やソ・コ・ア・ドの順番など）は現在ほとんど受け継がれていない。

(10) 三上（1955：174）における人称体系

称	近称（求心的）		遠称（離心的）	
	A称	H称	他称	疑問称
物	ソレ ソイツ	コレ コイツ	アレ アイツ	ドレ（何） ドイツ
所	ソコ	ココ	アソコ	（ドコ）
方	ソチラ ソッチ	コチラ コッチ	アチラ アッチ	ドチラ ドッチ
人	あなた おまえ きみ	わたし おれ ぼく	カレ	ドナタ ダレ

以上のように、人称代名詞と指示代名詞は、素直に連関していない。むしろ指示代名詞の方がその体系性の点でも歴史的な点でも典型的な「代名詞」らしい性質を持っている。この論点は、近藤（2000）のような新たな人称体系を生むこととなる。

(11) 近藤（2000：541）の人称体系

	指示詞	敬語	アスペクト	授受
話し手（一人称）	コ	謙讓	てゆく	てやる
聞き手（二人称）	ソ	尊敬	てくる	てくれる
中立（三人称）	ア	非敬語	ている	φ

5) 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』の体系を発展させたものと見られる。なお4つ以上の人称に関する他説については福沢（2017）参照。

近藤(2000)は、「人称」の定義そのものを大きく改めたものと見受けられる。その結果、敬語やアスペクト・授受表現まで「人称」の体系の中に組み込むという壮大な提案となっている。

一方「普通名詞と区別する必要がない」とする「単純名詞説」は、品詞分類上の議論である。即ち「名詞」と「副詞」を区別し、「名詞」と「形容動詞」を区別する必要はあるが、「普通名詞」と「形式名詞」を区別するかどうか、「固有名詞」「数詞」等々を区別するかどうか、といった議論の中で、「代名詞」は「普通名詞」と区別する必要はないとするものである。これらは、結果的に本稿で論じる点と矛盾するものではない。なぜなら普通名詞はみな「三人称」であると考えられるから、「代名詞」が「普通名詞」と区別されないのであれば、自動的にそれは「三人称」であると主張していることになる。但し、「三人称」という明示的な発言はなかなか見出せない。

このように、「いわゆる代名詞は「三人称普通名詞」である」という議論(三人称説)は、演繹的に考えれば自然と導き出せるものであり、その意味では別段特異な主張を前著で行ったつもりはなかったし、三上のように更に突っ込んだ考察をしたわけでもなかった。その意味で本稿は言わずもがなということになるかもしれない。しかし研究史上は確かに少数派の主張であったようであるので、その背景をやや詳しく述べておきたいと思うわけである。

### 第3節 語義の定義

語義(狭義には國廣(1982)のいう「語義的特徴」)の確定は意外と難しい。古代語「わ」「われ」も一人称代名詞と言われることが多く、「な」「なれ」「なんぢ」と合わせ、古代語には「人称代名詞」が存在した可能性がある。しかし、同時に「わ」には再帰代名詞としての用法(反射指示)もあるので、実は「一人称代名詞」なのではなく「再帰代名詞」であった可能性がある。

「先生」や「お父さん」はもちろん「普通名詞」である。つまり「三人称」である。しかし、にも拘らず、同時に「自称」としても用いられることがあり、別の場面では「対称」、殊に「呼び掛け」としても用いられることがある。「社長」「お巡りさん」なども同様である。つまり「三人称」の普通名詞は、常



に「他称」として用いられるとは限らず、「自称」「対称」として用いられることがある。そのため鈴木孝夫は「一人称」「二人称」「三人称」と区別して、日本語では「自称」「対称」「他称」の用語を使うことを主張した。この鈴木的主張は正当であるが、一般には一人称＝自称のように用いる論も少なくなく、鈴木の意味で用いているのかそうでないのかがすぐにはわからない。渡辺(2002)は「わがごと」「ひとごと」「よそごと」という別の用語体系を提案した。そうでなければ近藤(2000)のように「人称」の定義の方を改める必要がある。

「三人称」であっても「自称」や「対称」として用いられるということは、「自称」や「対称」として用いられていてもそれが「一人称」「二人称」の「代名詞」であるとは限らないということである。「あなたさま」という語が「対称」として用いられた例がある(そういう時代がある)とき、「あなたさま」が「二人称代名詞」であるのか、それとも「三人称普通名詞(ないし指示代名詞)の対称用法」であるのかを判断することはなかなか難しい。「殿」「手前(てまえ、てめえ)」等も同様である。つまり用例を見ただけではその語が「代名詞」であるかどうかははっきりしないことがある。

「自称」や「対称」として用いられることが普通であってもそれが「代名詞」であるかどうかははっきりしないということは、本稿の主張に繋がる論点である。即ち、「あなた」「わたし」等の「人称代名詞と呼ばれている語群」は、現代日本語としては未だに「三人称普通名詞」である可能性があるということである。

では、これらの語群を三人称普通名詞であると呼ぶことにどのようなメリットがあるのであろうか。第一に、「普通名詞」一般の特徴と共通するものとして次のような点が挙げられる。

既に指摘されているように「わたし」「ぼく」「おれ」など多くの使い分けがあるということは、一般に普通名詞の特徴である<sup>6)</sup>。同一物を「プラタナス」「鈴懸」「スズカケノキ」等と表現し分けたり、「食事」「ご飯」「めし」、或いは

6) Siewierska (2004: 9) は Sugamoto (1989) による 9 つの基準をもとに、言語類型として、より代名詞的(非名詞的)な言語からより名詞的(非代名詞的)な言語までのスケールを示した。日本語はかなり名詞的な言語であるが、最も名詞的なのはタイ語であり最も代名詞的なのはポーランド語であることが示されている。

「お子様」「子供」「ガキンちょ」等と言いつけたりするようなものである。語感や性格付けによって使い分けがある。いずれも場面や文脈によって特定個体が限定され指示される。もしも一人称・二人称代名詞ならばなぜ「わたし」「ぼく」「おれ」のような多くの使い分けが生じるのかが不思議に思えるが、三人称普通名詞ならば不思議ではない。

第二に、「境遇性」の問題があるので、節を改めて論じることとする。

#### 第4節 境遇性について

現代日本語のいわゆる代名詞が「三人称」であるという説に対して、以下のような反論が予想される。即ち、代名詞というのは境遇性を有するのであって、一般の普通名詞には境遇性がないのではないか。例えば話者Aの言う「わたし」と話者Bの言う「わたし」は常に別の指示物を指すのであり、また話者Aの「わたし」と話者Bの「あなた」が同一人物を指すという反転性が存在する。これに対して一般の普通名詞については、話者Aの言う「総理大臣」と話者Bの言う「総理大臣」とは同一人物であるのが普通であり、反転性もないのが普通である。このように一・二人称には境遇性があるのだが、三人称というのは一・二人称以外の第三者であって、境遇性を有しないと一般には信じられているようだ。

しかし、一方で「代名詞」の中には入れにくい語群にも境遇性を持つものがある。「倅（せがれ）」「家内」「弊社」などの語群である。これらは「三人称」の語群である。しかし「三人称」であっても境遇性を有し、ものによっては反転性も有するのである。たとえ話し手に関係する人物や集団を指すものであっても、「家内」や「弊社」をも「一人称代名詞」と呼ぶことは困難である。強いて言えば「わがこと」（渡辺 2002）語とは呼ぶことができるかもしれないが、常に「わがこと」用法を持つものではなく、また「わがこと・ひとごと」ならばもはや「代名詞」の話ではなくなっている。

境遇性のある語であっても「わがこと」用法を持たないというのは、次のようなことである。「わがこと」の特徴として、「一人称」には使えるが「二・三人称」には使いにくい、例えば感情形容詞の「人称」制限という現象があ

る<sup>7)</sup>。しかし「わたしは寂しい」と同じ用法として「家内は寂しい」が使えるわけではなく、「家内は寂しいらしい」と同じ用法として「わたしは寂しいらしい」が使えるわけではない。このように「家内」はやはり「ひとごと」（この場合「三人称の普通名詞」）である。三人称であるにも拘らず、「#貴方の家内」とか「#一般に韓国人男性の家内は～」などとは言いにくいという境遇性を有する。このように、「境遇性」と「人称」「わがこと・ひとごと」とは結びつくものではなく、「三人称の普通名詞」であっても境遇性を有する語群が存在する。

「弊社」「貴社」も同様である。話し手Aが「弊社は～」と言うとき、聞き手Bはそれを「弊社」として言及することはない。「Aが弊社と呼ぶ会社」のことをBは「貴社」として言及することになる。ちょうど「I」と「you」の関係、「わたし」と「あなた」の関係と同じで、境遇性と反転性を有する。このとき「弊社」「貴社」は果たして「一人称」または「二人称」の「代名詞」<sup>8)</sup>と呼ぶべきものなのであろうか？ それは困難である。

「弊社」「貴社」が「代名詞」でなく「普通名詞」であるということは、翻って「わたし」や「あなた」が果たして「代名詞」なのかどうかという問題に再び立ち返る必要性を喚起する。それとも、「弊社」「家内」も「一人称代名詞」の中に入れた方がよいのであろうか？ それは「話し手・聞き手」によって人称を定義する限り、困難であると言わざるを得ない。

## 第5節 わざわざ「三人称」と呼ぶ必要があるか

さて、標題は予想される反論としてもっともな指摘である。確かに全ての名詞が三人称なのであれば、或る特定の名詞をわざわざ「三人称」と呼ぶ必要はない。例えば現代英語の二人称単数について、you が複数形である (you are～) からといって、「現代英語の二人称代名詞には敬称しかない」とわざわざ言う

7) 正確には、感情形容詞の「人称制限」という現象は「人称」による区別ではなく、文学理論でいう「焦点化」かそれに近い概念の区別である。福沢 (2017) 参照。後に上原 (2015) のあったことを知った。

8) 「人称代名詞」という部分に差し支えがあるのであれば、適宜「社称」とか「法人称」とか呼んでおけばよい。そうであっても「一社称代名詞」と呼ぶことは困難であろう。

必要性は薄い。

しかし話し手・聞き手をまず単数のものとする定義上、やはり「三人称」であると言わなければならない。それは「身内」の問題があるからである。例えば話し手から見ると第三者だが聞き手から見ると「身内」である、といった非対称性（境遇性）があるようだと、それを「二人称」と呼ばなくてはならないのであろうか。しかし、「聞き手の身内」であっても「聞き手」そのものではない以上、それはどうしても「二人称」ではなく、「三人称」である。「聞き手の身内」をどうしても「二人称」として位置づけるためには、繰り返しになるが、近藤（2000）で議論されたように「人称」の定義を大幅に見直す必要が生じる。

近藤（2000）の議論は、「これ」「こちら」も「一人称」であり「それ」「そちら」も「二人称」である、というように「人称」の定義を大きく変えるものである。こうすれば、「話し手の身内」はみな「一人称」であり「聞き手の身内」もみな「二人称」であると記述することができるようになる。しかし近藤の修正によってもなお解決されない問題がある。それは(7)のように、現代日本語の「人称代名詞」の種類が多く、閉じた集合になっていないという点である。従って、やはり「わたし」「ぼく」等を「普通名詞」として位置づけなければ説明がつかない。

「わたし」「ぼく」「あなた」等の語群に対し、たとえ「普通名詞」として位置づけたとしても、それは「家内」「弊社」「貴社」等の語群にも見られる特徴と共通するものであり、「三人称」の「普通名詞」の一種であることには違いがなく、問題はない。こうして、現代日本語においてはあらゆる名詞が「三人称」の普通名詞としてパラダイムを成していると見ることは、十分に成立するわけである。

## 第6節 自己概念との関係

さて話題は変わって、日本文化と「欧米」の文化との比較の中で、そのコミュニケーションのあり方の相違や、「自己」のあり方の相違が指摘されることについて触れておく。鈴木における(8)や、廣瀬／長谷川（2010）における

「公的自己」「私的自己」の区別もその一つである。ではその中で、本稿の三人称説はどのように位置づけられるだろうか。

時枝（1941）は言語の「主体」を論じたとき、「私」などのいわゆる一人称の表現と「表現主体」の概念は異なるということを描した。「私」という表現は表現主体そのものではなく、表現主体を「対象」化したものであると。ここでは「主体」そのものは決して言語化され得ないものである。

また廣瀬／長谷川（2010）の「私的自己」もまた、「自分」等の表現そのものではないようである。「わたし」の表せる範囲よりもはるかに狭い私秘的な主体である。

ごく狭い私秘的な主体にとって、世界の大部分はどのように把握されるのだろうか。「三人称」として把握されるわけである。「木」と「電柱」を区別するように、「虎」と「猫」を区別するように、「犬」と「人間」を区別する。「おじさん」と「おとうさん」を区別し、「おかあさん」と「おとうさん」を区別するように、「おにいちゃん」と自分とを区別する。このとき、自分を指す語として「ぼく」「おれ」「マサキ」<sup>9)</sup>などが考えられるが、世界の切り分け（いわゆる言語の恣意性の一つ）を行っているという点では、たとえ「人称代名詞」や「固有名詞」であっても、他の普通名詞同士の使い分けと同種のことを行っているに過ぎない。それは話し手自身や、聞き手に対しても同様である。

自分自身についても世界の切り分けの一つとして行っているということは、どういうことであるか。「たべる」と「くう」「くらう」「いただく」を区別するように、「わたし」と「ぼく」「おれ」「マサキ」等々を区別するということである。このとき、自分自身を表す呼称の区別は、他者を表す語彙の区別と同じようなものとして行われている。

9) 「下の名前」で自分を言及する用法は、女兒（及びもう少し年齢を重ねた女性）の一部にのみ見られるというイメージが一般にはあるだろう。ところで筆者自身はどうであっただろうかと考えてみた。すると、子供の頃家庭内で自分は「ぼく」も「おれ」も使った記憶がなく（「おれ」というガラでもないし、「ぼく」という標準語はどれも気恥ずかしかった）、何も使わなかったか、もし必要があれば下の名前「マサキ」と呼称していたのではないかという結論に至った。よって一般のイメージと自分自身との間には、些かズレのあることがわかった。この自己固有名呼称の男性による使用についてはもう少し調べてみたい。なお筆者は末っ子である。

自分自身の区別であろうと、他者の区別であろうと、同じようなこととしてあるということは、どういう世界観を表すものであるか。それは、ある私秘的な表現主体の視点から見ると世界は一様に他者として広がっているということである。但し相対的に自己に近い物事と、相対的に自己のコントロールの及ぶにくい物事との違いがあり、それらがグラデーションを成しているにすぎない。もし時枝の言う「対象」化を行って、自分自身を言語化しようとすれば、他者を表すのと同じように三人称普通名詞を用いて言語化することになるのも当然である。

自分自身を言語化する際に、他者を言語化するのと同じような方略を用いるということは、そのニュアンスに応じて語彙の使い分けを行うことが、必然的について回るということである。つまり「わたし」「ぼく」「おれ」「こちら」「じぶん」「当方」「てまえ」等々の使い分けが生じることは、私秘的な主体から見た世界観からすれば必然的なことである。二人称について「あなた」「きみ」「おまえ」「そちら」「お宅」等々の使い分けが生じることも同様である。もちろん、語彙は必ず豊富でなければならないということはないわけで、一語で全ての「話し手」を担い一語で全ての「聞き手」を担うような言語でもあり得たわけだが、関心の高い分野の語彙が豊富になるのは仕方がない。人間は人間に関心を持たざるを得ず、とりわけ自称・対称の関わる人間関係には特段の関心を持たざるを得ない<sup>10)</sup>。

## 第7節 まとめ

本稿の主張をまとめると、以下のようになる。

(2) ① (=1) 現代日本語におけるいわゆる「人称代名詞」は、全て「三人称」である。

②三人称の普通名詞を用いて「話し手」「聞き手」を指示するというこ

10) もっとも、人間関係が必ず「上下関係」である必要はない。三輪らが問題視したように、日本語の特質として、人間関係に常に上下関係がついて回るところは、「私的自己」とは別の問題としてある。但し、上下関係は、日本文化だけの問題ではなく、韓国その他の文化にも見受けられるものである。

とは、不思議なことではない。

その他、「キャラ」との関連や、「自敬表現」との関連などにも触れたかったが、紙数が尽きた。別の機会に譲りたい。

#### 参考文献

- イエスベルセン (2007) 『言語：その本質・発達・起源(上)』岩波書店 (岩波文庫) [改版。三宅鴻 (訳)]
- 上原聡 (2015) 「日本語の「人称制限」は「人称」制限ではない——内的状態述語における話者・概念化者・体験者の区別——」『日本認知言語学会論文集』第15巻
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版(下)』岩波書店 (岩波新書)
- 國廣哲彌 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 佐久間鼎 (1959) 『日本語の言語理論』恒星社厚生閣
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店 (岩波新書)
- 鈴木孝夫 (1982) 「自称詞と対称詞の比較」國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』大修館書店
- 鈴木孝夫 (1996) 『教養としての言語学』岩波書店 (岩波新書)
- 鈴木孝夫 (2009) 『日本語教のすすめ』新潮社 (新潮新書)
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造：推論と知識管理』くろしお出版
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店
- 廣瀬幸生／長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人：主体性の言語学』開拓社
- 福沢将樹 (2015) 『ナラトロジーの言語学：表現主体の多層性』ひつじ書房
- 福沢将樹 (2017) 「文学の「人称」と言語学の「人称」」『文学・語学』219
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』刀江書院 (くろしお出版による新装版 (2002) による)
- 三輪正 (2000) 『人称詞と敬語：言語倫理的考察』人文書院
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館
- 渡辺実 (2002) 『国語意味論』塙書房
- Siewierska, Anna (2004) *Person*. Cambridge University Press.
- Sugamoto, Nobuko (1989) Pronominality: a noun-pronoun continuum. In: Roberta Corrigan, Fred Eckman and Michael Noonan (eds.), *Linguistic Categorization*. John Benjamins.